

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 軍記物語における救済と教訓

氏 名 横山 知恵

論 文 内 容 の 要 旨

軍記物語には、武士同士の闘争や滅びゆく者への鎮魂が淡々と描かれているわけではなく、記録する人々の敗者への視線には、時に寛容な眼差しが向けられる。戦いを男たちの物語とすれば、後日譚は女たちの物語である。男たちの死後、遺された女たちは彼らの菩提を弔いながら、自らの浄土往生を願うが、そこには死者の鎮魂に加え、生者の〈救済〉も含まれる。同時に滅びを迎えた人々の事跡を記録することは、後世の人々への〈教訓(誠め)〉ともなっていく。本論文では、従来軍記物語研究では女人往生を物語全体から考察した論文がそれほど見られなかったことに着目し、女性が妄念を克服し往生を遂げるまでの過程を追うことで、物語に込められた女性に対する救済の意識を明らかにした。また、軍記物語全体を通して見られる「おごれる人(者)の滅び」「盛者必滅」という主題が、かつて自明の理としてほとんど言及されてこなかったことに着目し、「驕り」「侮り」などといった誠めるべき心の問題を繰り返し描くことで、自覚することの大切さが示されていたことを論じた。

第一部においては、『平家物語』諸本中延慶本に考察の対象を絞り、第一章と第二章で女人往生による救済を、第三章と第四章は誠めの意識をテーマに、物語全体に行き渡る延慶本編者の意識を考察した。物語を細部から捉え直すことで、延慶本独自の表現の一端を明らかにし、新たな作品の読みを提示する。第一章では、義王(祇王)の物語と同様清盛悪行譚の一挿話として、また紅葉や葵の前の物語とともに高倉院追悼説話群の一挿話としての性格を持つ小督の物語を、人物造型から再考する。これまでとは違った位置づけを示すことで読み取れるのは、物語全体に関わる女性の救済の問題である。延慶本だけが宮中追放後の後日譚として小督の往生を記し、その最期の地が「大原」であることに注目すると、信西入道の子女という出自が関係していることに気づく。「大原」という地が阿波内侍の存在を媒介として、終末部の建礼門院の物語と間接的に結ばれ、女人往生の主題を暗示する役割を持つことを指摘した。続く第二章は、延慶本全体における女人往生の物語を考察

した。男女を問わず、この世への妄念を克服し極楽浄土へ往生するためには、仏道上の導き手である「善知識」の存在が不可欠であった。『平家物語』諸本では、多くは出家の際に戒師を務めた僧侶や臨終時に付き添い往生へと導く役割を持った上人・聖を指し、また人の死を目の当たりにしたことをきっかけに発心する場合も「善知識」と解釈される。延慶本では「善知識」の存在は単なる仏道上の導き手という枠では捉えられない。女人往生を遂げた人々は自らの身に起こった「憂きこと」を「善知識」として、道念を起こすきっかけとしたが、この考え方は『宝物集』の「憂きことにあふも善知識」という思考法に基づいていると思われる。本章では、「善知識」の語を用いない小督と明記する建礼門院の物語を取り上げ、この世での「恨ミ」を「一旦ノ恥」として往生への願いに昇華しようとした意識があったことをつきとめた。この意識が二人の妄念を克服する重要な要素であり、物語全体に行き渡る救済へとつながっていることを明らかにした。第三章は、延慶本編者の視線から「驕り」に対する誠めの意識を論じた。『平家物語』では、「驕り」を自覚せず身勝手な振舞いを慎まなかったことから平家一門が滅びを迎えたとして、その因果応報を教訓として繰り返し記してきたが、ただ「驕り」を批判するのではなく、渦中にいる人物が自覚する必要があったことを示唆していた。特に生前から「驕り」による滅びを予見した重盛に加え、一門の滅びを目の当たりにしてはじめて「驕り」を認識した二位殿と、母の自覚を繰り返すことで自らの「驕り」を再認識した建礼門院の二人の女性の自覚を記し、地の文でなく三人の口から語らせることで、滅びを止める鍵は自ら誠める意識にあったとする。建礼門院は、同時に「天子ヲ蔑如ニシ奉リ、神明仏陀ヲ滅シ」と神々に対する罪の意識までも自覚しており、これは物語冒頭部「縦ヒ、人事ハ詐ト云トモ、天道詐リガタキ者哉。」の一文ともつながる、物語の展開上重要な要素であることを確認した。第四章では、物語終末部「人ヲバ思悔ルマジキ物也」に延慶本編者の意図が隠されていると仮定し、「悔り」に対する誠めの意識を論じた。『平家物語』は、清盛の口を借りて「忘恩者」である頼朝は自滅するという論理を示していたが、頼朝は自滅する事もなく、かえって後白河法皇の院宣を得て、亡き父の雪辱をすすぎ、「報恩」ではなく「報復」行為を行った。清盛の「驕り」の報いが子孫の滅亡へとつながったと記し、「驕り」という行為を慎まなかったことを「誠め」と捉える。同様に「悔り」もまた、人を見下す振舞いとして、「欺く」とともに物語全体にわたって何度も繰り返し記され、清盛の熱病死は「悔り」の報いであると明示する。心の問題として捉えることで、「驕り」と「悔り」が終末部で呼応することを指摘した。

第二部においては、読み本系『平家物語』との影響関係が指摘される『曾我物語』を考察の対象に選び、特に真名本を中心に論じた。第五章は女人往生に関して、第六章と第七章では誠めの意識に関して考察した。第五章は、曾我兄弟の兄・十郎の恋人であった大磯の遊女・虎の女人往生について、真名本独自の「邂逅」の場面から論じた。虎は、残された女が持つ悲しみや苦悩を物語の中で体現し、その苦しみを背負いながら、十郎の死後の

苦患を和らげるため、自らの妄念を克服するために廻国をする。虎は諸国をめぐる中で、兄弟に関わり命を落とした夫を弔う二人の妻(往藤内の妻、京の小次郎の妻)と出会い、さらに十郎の幻と歌を交わす。虎にとって「邂逅」は、兄弟の菩提を弔う巡礼の旅の過程で「善知識」と同様、妄念を克服する重要な役割を果たしていたことを明らかにした。第六章では、真名本における男女の結婚と〈家〉の意識の関わりを論じた。源頼朝と万寿(北条政子)、曾我兄弟の母・河津の女房と曾我助信の二組の結婚は、頼朝をめぐる伊藤(伊東)氏と北条氏の認識のちがいと重なり、両氏の〈家〉の形成と存続に深く関わっていた。本章では二人の女性の心情描写や行動から〈家〉に対する想いを考察した。伊藤助親は三女と頼朝の仲を裂き、孫である若君を殺害して娘を別の家へ再嫁させるが、北条時政は万寿と頼朝の仲を黙認し、助親の迫害から守っている。娘の万寿は、父の決めた相手よりも自ら望んだ夫への貞節を守り、夫の没後も家を支えていくが、依然として意識は北条の〈家〉に帰属する。一方河津の女房(曾我の女房)は、遺された幼い兄弟の養育のため舅の助親の命に従って再嫁するが、表向きは現夫の曾我殿の妻としてありながらも、意識は前夫の河津殿(伊藤)の〈家〉に帰属する。頼朝の関東での勢力確立の陰で起こった伊藤一族の内紛、曾我兄弟の報恩を描きながら、同時に真名本作者は〈家〉の存続に対する認識の違いを意識していたことを指摘した。続く第七章は、物語全体を通してみられる教訓場面から、曾我兄弟の敵討に対する親族側の意識と、鎌倉殿(頼朝)という為政者側の視線を対照しながら、報恩という問題を考察した。頼朝が鎌倉に拠点を置き、「さしも怖しき世」へと社会が移り変わりゆく中で、敵討という行為に対する認識も変化していくが、兄弟は亡き父への「報恩」という自らの意志を貫き、命を散らしていった。頼朝対兄弟の関係は、十郎の討死、五郎の処刑で一応の決着をみるが、真名本作者は兄弟の「報恩」を否定的に描いてはいない。頼朝は尋問の中で、「謀叛人の孫」ではなく一人の武人として五郎を評価し、「男子の手本」と賞して助命までも考え、敗者に対する寛容な視線すら投げかけていたが、為政者としての立場に徹した。兄弟の祖父が頼朝と娘を引き離し、敵・助経から所領を奪い取るという強引な行動がなければ敵討は起こらず、子孫に「報」がくることもなかったと解釈できる。この物語も誠めとして読み取れることを指摘した。